

A. M. Hunter. *Interpreting Paul's*

*Gospel*, S. C. M. Press, London, 1954. pp. 144.

Hunter は新約關係の著書を最近次々に著わして我國に於て多く知られてゐる。本書は特にペウロの思想を簡単に紹介したものであつたが、近代の學者の解釋などを多くとり入れて興味深く解説がなされており、教會の聖書研究のためにも多くの示唆を與へてくれる書物である。ペウロの思想を主として「救濟」の思想を中心としてそれを捉えようとしている。ペウロに於ては「救濟」は過去、現在、未來の三方面から示されで、これに論じてある。We were saved (Rom. 8: 24). "We are being saved" (I Cor. 15: 2). "We shall be saved" (Rom. 5: 9)。又「トガグー」(Eros) と G. B. Caird の論文 (Eros is all take; philia is give and take; agape is all give) を紹介している。其他原罪説、豫定説等の現代的意義を興味深く説明している。その教會論、聖靈論も注目に値する。しかも神學の入門書として適當な書物である。

(画橋)

エムプリック等にて講義をなし、英國の教會のみならず思想界に基督教の立場から影響を及ぼして、練達の士である。彼が現代社會に於ける宗教の役割に深い關心を持つてゐる事は、次の一様な數種の著述をみても解る。The Divine Society, The Divine Revolution, The Social Implication of the Oxford Movement 1933, The Salvation of Modern Man, An Outline of Christian Sociology, etc.

英國に於ける基督教の社會活動に神學的基礎でさなびて來た一つの有力な流れは F. D. マカリク (Frederick D. Maurice) からテイブル (William Temple) に至る國教會の一群である。これは周知の事實である。前者は前世紀中葉の基督教社會主義運動の創始者であり後者は所謂クリヤンタム・グループ (Christendam Association) の指導者である。ペラクダ、A. ハーマン (V. A. Demant) や M. B. リッカム (M. B. Reckitt) 等と共に之の有力な構成員であった。リッカムはチャーチの好漁 Maurice To Temple, 1952, Faber, London に取らかれてある。又の著西體 (ハタ) に獻げられたるものは興味深く、又ハタの思想的背景として想れてならないが交りば、Industrial Christian Fellowship 並ねハタ、ハタに於ては Roger Lloyd:

William G. Peck:

*A Christian Economy*, The Macmillan Co. London.

著書ウイローベイ、ペラクは一九〇六年にメソヂスト教會の牧師となつたが、一九二八年に英國教會に轉じ、オクスフォード、ケ

1950 話述された。

本書の題題は多少誤解を與えるおそれがある。基督教經濟學 (A Christian Economy) は、もはや基督教の理想とする經濟秩序

又は基督教特有の方法論をもつてなされる經濟學の研究を意味する感がある。しかし本書を通讀して感することは、著者はそうした意圖を持つてゐるのではなく具體的な經濟的な問題に對して基督教の價值觀より批判をなしてゐるのであつて、基督教と經濟秩序を同一次元の上に於ているのではない。之は英國の *Christian Sociology* というタイトルにも存する共通の點で誤解を招き易いと思ふ。

さて、本書は十の章から成つており、第一章より五章までに於て英國の社會的狀態の分析をなし、その困難性を指摘してゐる。積極的に開かれた可能性に立つたアメリカの經濟的狀態と異り、食糧生産の限度に達し、植民地の解放と近代工業の發展と共に最早や工業生産品を世界の市場に英國の「特產品」として供給し得なくなりつゝある英國の窮状は我が國に通ずること多く、しかも、その中で福祉國家建設の道を示唆しつゝあることは興味深い。尙年約百六十億ドルの海外貿易をなしその半分即ち約八十億ドルを弟で求めつゝあるアメリカの經濟的壓力の世界の諸國家に及ぼす影響力の大なることを說きその適切なる政策のなされんことを主張している。(p. 17)

最後の二つの章は主として變革期に於ける教會の使命について論じた小論で、スペインの哲學者 J. オルテガの言つた「マスマント」又はニダヤ教の確學マルチン・ブーバーの用いた「顏なき群衆」という概念に表現されている現代人の姿を記述し教會の語るべき福音の意義を示唆している。それはキリストにある神の恩恵を通して新らしき存在とされる事であり、分化されつあり意味を喪失しつゝある社會に眞に意義を與え、目的を示すことである。更に國家とコムミニティを區別し、國家はコムミニティの一機能であつてその逆であつてはならぬことを力説し、平信徒

來の希望に生きる統一體であることを、共產主義の理論が主張している點を指摘してゐる。即ち共產主義を單なる經濟理論としてではなく唯物辯證史觀に立つた一つの宗教的運動として把握している。この點に於てトエムビーが *Civilization On Trial* に於て述べている共產主義觀—即ちロシヤに存する歴史的な傳統的な力が共產主義の解釋發展を獨特なものとしたという論を支持している。コンスタンチノーブルを中心としたビザンチン帝國は、極端な國家主義に立ち、宗教を國家權力の爲用いたエラスチアン教會(Eastian Church)であった。それは一四五三年にトルコによつて征服されるまで「第二のローマ」として君臨していたが、其の後はモスクーが「第三のローマ」として中央集權的國家として人々に革命への終末論的メシヤ意識を昂揚しつゝ、思想と宗教とが、特定國家權力の増大の爲に援用されて來たことを指摘している。(p. 107)

次の部分に於て著書は共產主義の分析と批判を、「共產主義の背景」「共產主義の本質」「基督教の答」という三つの章にわかつて論じてゐる。共產主義の出現して來た原因を近代產業社會の非人格化されたプロレタリヤの中に見出し、人間が機械的手段でなく目的であり、分化された原子的個體でなく、一つの歴史觀と未

の働きを強化する」とじよつて、教會が贋れたものの共同體として世俗化せる現代社會によき音信を語るべき」とを説いてい。この書物には殘念なことに出版年代がない。書中に一九五三年六月の戴冠式直後に出了ターム誌の論説に觸れて、あるところがあふ故(p. 23)恐らく一九五二年—五四年の間であると思ふ。

### Liston Pope, Milhands And Preachers,

*A Study of Gastonia, First Published 1942,*  
Third Printing 1953, Yale University Press.

わざと新刊書として取り上げるやうあらわすと思ふが、今度第三版を手にしたので、簡単な紹介を加えて置きたいと思う。著者は今年一月はじめに來朝したエール大學神學部長であり、社會倫理學教授である。本書はエール大學に提出した博士論文に基くもので、一九四〇年にジョン・ボーター賞を受けており、宗教社會學における基本的参考書の一つとして内外に高く評價されている。例えば、カソリックの著名な社會學者、フィチャーの研究、Joseph H. Fichter: *Southern Parish, Dynamics of A City Church*, 1951 やコベーン・ボートの研究に負ふとのを明記しており、(同書序)、ショットランの聖アンドリュー大學の基督教倫理學教授、トマス・スター博士の著 W. R. Forrester: *Christian Vocation, Studies in Faith and Work*, 1953 に於てボートの研究を引用してある。(同書 p. 16)

本書は北カロイナ州ガストニア地方に於ける紡績企業と教會と

の動的な相關關係を綿密に分析した宗教社會學的勞作である。取り扱われた年代は、一八八〇年から一九三九年に亘る約六〇年間であり、其の間に於て、紡績企業と教會という二つの社會的な集團が互に、社會變革に當つて如何なる役割を果し且つ影響を及ぼしたかについて、丹念にして冷徹なる考察がなされてゐる。從來の宗教社會學の業績に比して次の諸點を本書の特色として擧げることが出来ると思う。

(1) 先づ方法論として、記述的な分析がなされているが、宗教社會學の多くが、デュルケム等のなした原始人の宗教と社會の關係や、或いはトレンチ、ウエーバー等の試みた如き、歴史的又は理論的な兩者の關係の分析に偏し勝ちであつたのに對し、現代と密接に結びついている時代の特定の集團を限定して深く分析のメスをえた點に於て特色があると思う。廣漠とした幾世紀という年代や、輻輳せる諸種の社會的集團の中に對象を喪失することなく、それを時間的に空間的に限定して、結集した分析をなしている。

(2) 従來宗教社會學で用いられて來た方法の一つは Ecological (生態學的)な分析があり、H. Paul Douglass: *1000 City Churches*, 1926 はその好例であるが、ボートの研究は、生態學的分析を用いつつそれにも留らず、それを通して把握された資料に立つて、二つの社會的集團の相關關係を追求している。即ち二つの集團間の靜的な分析から動的な分配、影響、作用等を検討している。

(三) 宗教的集團と經濟的企業は互に他を規定し合つており、一方が他を究極的に規定するという一面的な見方は許されない。ことをその研究の結果として明らかにし、宗教的な要素に強調點をおいたウェーバー及び經濟的な要因に支點のあることを主張したマルクスの見解よりも、兩者の相互規定と聯關係を説いたH・ベルグソンの説を著書は支持している。(p. 332)

(四) 更に、兩者の相關關係の内容について次の六つの類型を示している。(四) 宗教的集團が經濟的な集團に對して、

(1) 動的な表現によれば

A、經濟的變革の源泉となる場合

B、經濟的變革の結果である場合

(2) 静的な表現によれば

A、支配的な經濟的組織及びその文化に賛成をなし支持する場合

B、支配的な經濟的組織及びその文化に對し批判攻撃をなす場合

(3) 機能的な表現によれば

A、經濟的領域そのものに對して無關心である場合

ボーグは之ら六つの類型が具體的なガストニヤに於ける教會と紡績企業體との間に夫々見出されたことを報告し、一つの決定的な類型に兩者の關係を閉ぢこめてるつてはならぬことを論じてい

る。(p. 332)

(五) トrelloチ及びウェーバー以來指摘されて來た教會と分派の社會學的相違を更に綿密な實證的分析によつて明らかにし、二つの點を擧げて兩者の形態の特色を對比し、分派は次第に教會の形態を取るに至り、再び新らしい分派の發生を促すというリチャード・ニーバーの説を實證している。

(六) 現實の社會變革は集團と集團の交錯又は相互活動 (institutional interaction) を通してなされるものであつて、個人主義的な活動は社會變革に積極的貢献をなすところが少いことを指摘し、次様に述べてゐる。

「現存する經濟生活に對する組織的な反対を加え、それによつて現在の狀態への批判をなして社會變革に對する積極的な道を辿らない限り、それは徒勞に終るであろう。」(p. 334) と言つてゐるのは、個人主義的な倫理の範疇に陥ち入り勝ちなプロテスタン

トとして聽くべきことであると思う。

然しこの場合ボーグは多少分派の果す社會的役割を過少評價してはいいかという疑問が残る。勿論對象となつたガストニヤの分派にはウェーバーの取り扱つたピューリタン的分派や今日平和主義運動で活躍しているクエーカーの如きものが見出されなかつたに違ひない。分派の形態は必ずしも組織的なものでなく、一時的流動性の強いものであるが、その中に流れている精神には惡に對して預言者的な嚴しさをもち、終末論的把握に立つて、少數者として福音の純粹性を保たんとした例も見出されるのではないか

と思ひ。この點、分派の中に流れる純粹性へのモーティスと教育の持つ社會的集團としての恒常性との緊張關係の中にプロテスタントの社會活動の課題が存してゐるのではないかと思う。

T. E. Jessop: *Social Ethics: Christian and Natural, R Problem for the Teaching Church*, The Epworth Press, London, 1952.

著者がここで取り上げてゐる問題は次の様な我々にとつても關心のある課題である。即ち「キリスト教が變革しつゝある社會に對して積極的な貢献をなしつゝあるか」という自己反省はじまる。そして若し缺くるところがあるならそれは、教會の働きに應答しない社會の故であるが、或いは、それは教會自身が福音の内なる力を充分に生かすことなく社會に對する責任を完うしてゐない爲であろうか、という自己批判に及んでいる。著者ジェンソップは英國のハル大學の哲學教授であり、後者の見解を支持し教會の反省を促している。

教會の社會活動の効果が消極的である理由を五つ挙げている。

第一は基督教の福音が正しく理解されていない故に、基督者の社會に於ける責任が神學的に明確にされなかつた憾がある。第二は具體的な困難から生ずる消極的な見解であつて、教會が一定の政黨や特定の社會制度を支持することが現實に困難である事を説く。第三には從來プロテスタンティズムが社會變革に對して貢獻して來た道の一つは、内世俗的禁欲に基いた勤勉、節制、正直等

による德性によつたが、現代の騒がしい雜踏や快樂を求めてひしめきあつてゐる大衆の中につてその効果が乏しくなりつてゐる事。第四にはかかる世俗化された產業社會に於て教會は人的な又物的な資源に適材を缺く傾向にある。そして第五に教會自身の信徒の教育特に基督教社會倫理についての成人教育が不充分であつた。信仰に至るまでの入門的な訓練はなされたが、信者はそのまま傳統的な教會のしきたりの下に置き去りにされた。「彼らは、肉を供せられる代りに、子供のうけるミルクをいつまでもあてがわれていた。」(p. 17) と述べている。

かかる反省から出發して、ジェンソップ教授は基督教の社會觀の原理として次の三つの點を擧げて論を進めている。

- (1) 個人と社會は神の主權の下にある。(p. 22)
- (2) 社會の目的、機能は個人に對する神の御意に適うるものでないことはならない。(p. 28)
- (3) 社會は個人の爲に存在するのである、その逆であつてはならない。(p. 32)

著者はこうした社會觀に立つてその倫理を追求している。この際、著者の立つてゐる見解は、社會倫理は自然法的良心 (The Natural Conscience) の上に先ず立てられるものであつて、基督教の愛はその後に成就するものであるという考え方である。その理由として著者は次の二つを擧げている。即ち第一には基督教倫理の主張する愛は個人と個人の人格的交りに於て成立するものであつて、社會的集團と集團の間を規定するものとならない。第一に

我々の社會的集團、一國家であれ經濟的團體であれ——それらは非基督教的であり、直ちに基督教倫理を受け容れる基盤に乏しい。それ故基督者のみに適用する原理に立つて非基督教的社會に出で行くなら、特定の歴史的狀態を把握し得ず社會に對して、否定的攻撃をなすのみに終るであろう。(P. 53 f.)

ここに著者は現實の分析、觀察が嚴密になされ、具體的倫理的決斷をなさない限り、教義學的な教訓は否定的要素は強くなつても、積極的な建設的要素を缺き優柔不斷に陥る危險性のあることを說いている。

最後に國際間の問題を具體的な例として取り擧げ、(1)集團(2)の場合は國家の責任、(2)集團の一員の責任、(3)集團の代表者の責任について論じている。

本書は一九五一年七月英國メソヂスト教會の協議會でなされた講演を主體としており、平易に書かれており、著者が單に哲學教授として著名であるのみでなく、B. B. C. の放送講演やSCM(基督者學生運動)の運動を通して名高い講演者である丈に、論旨も明解であり一讀して啓發されるところが多い。

唯多少問題となるところは、自然神學と啓示の關係が充分説かれていない憾があり、社會倫理を自然法の上におき、基督教倫理を愛の誠の上に立てようとする二元的斷層を感じさせられる。この點キリストイエスの啓示を基礎として價値の問題を論じたりチヤーム、ニーバー教授の "The Meaning of Revelation" 1946と比べると興味深いと思ふ。(以上[三]書 竹中)

Eduard Schweizer, *Erniedrigung und Erhöhung bei Jesus und seinen Nachfolgern, Abhandlung zur Theologie des Alten und Neuen Testaments, Zwingli Verlag, Zürich 1955.*

エドゥアルト・シュヴァイツァーはチューリッヒ大學の新約聖書學の正教授であり、毎週ベルリンでも講義を行つてゐる。彼はチューリッヒにある改革派學生の寮の寮長であり、彼も彼の家族もキリストによつて各學部から集められた學生達と共同生活を行つてゐる。シェヴァイツァー博士は日曜日にはチューリッヒにある教會の一つで説教する。説教は一群の「神學者でない」人達と共に準備される。禮拜に於てはこの非職業的神學者達が種々の奉仕をする。禮拜後聽衆と共にもう一度説教に就て討論する。神學と實踐とは凡ゆる健全な神學に於いてそうでなければならぬよう不可分のものとして取扱われている。この神學と實踐の一致とやうことは本書に於ても明らかにされてゐる。著者は先ず極めて實際的な問題から始める。それはシュヴァイツァーの嘗ての師、ルドルフブルトマンをも動かした問題である。シュヴァイツァーとブルトマンとの相違は、ブルトマンが新約聖書に縁遠い方法を以つて新約聖書に立ち向うのに對して、シュヴァイツァーはその中に問題に関する解答を見出すべく、新約聖書を探べると云ふことである。その問題とは今日の人間に對する宣教の問題である。ブルトマンはシ